

魔法少女リリカルなのは は IFストーリーズ

アルバロスガロード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある町に住む少女が魔法に出会い魔法少女となり、自分の住む町にばら撒かれた危険な異世界の遺物を集める物語。更には遺物を集める少女の前に現れるライバルや異世界の警察。そして、少女は同じく魔法少女・魔法少年となった友達と共に世界を救う。

目次

61

第一話 『それは不思議な出会いなの？』

1

第二話 「魔法の呪文はリリカルなの？」

16

第三話 「これからの覚悟と新たな来訪者

なの」

23

第四話 「魔法少女の日常なの」

36

第五話 「なのはの素質と実力なの」

45

第六話 「二つの大きな出会いなの」

52

第七話 「街は危険がいっぱいなの？」

第八話 「動き出す者達」

70

第一話 『それは不思議な出会いなの？』

（某所）

「は。は。は。」と赤みがかつた木々の中を一人の少年が走っている。すると後ろの茂みが、ガサガサ揺れ出し謎の黒い塊のような物が飛び出して来た。少年はさっと振り返り、手を前に出し、

「妙なる響き、光となれ。赦されざる者を、封印の輪に。ジュエルジード、封印。」

と叫ぶと前に黄緑色のバリアのような物が出現した。それに衝突した黒い塊は四散した。

「逃がしちゃった。追いかけてくちや。」

少年は、力尽きたのかその場に倒れてしまった。少年は薄れゆく意識の中、「誰か。誰か、僕の声を聞いて。力を貸して。魔法の力を。」と念じていた。そしてその体を黄緑色の光が包んだ。

（海鳴市のとある住宅）

とある住宅の一室で、ベッドの上にあるスマホのアラームがなった。すると、布団の中から手でスマホを探しながら、一人の女の子が起き上がった。彼女が本作の主人公で

ある。

「はあく」と言いながら私は起き上がった。

「何か変な夢見ちゃった。」

と不思議な夢を見た私は独り言言いながら着替え初めた。

私の名前は、高町なのは。私立聖詳大附属小学校に通う小学3年生なの。この高町家では、三人兄妹の末っ子さんです。

一階の居間には三人の人物がいったの。

テーブルで新聞を読んでいるのは、私のお父さんで一家の大黒柱の高町士郎さんです。昔は凄腕のボディーガードで、御神流剣術という流派の正当後継者で今は商店街で喫茶翠屋のオーナーをやっている私の自慢のお父さん。

キッチンで料理をしているのは、私のお母さんの高町桃子さん。喫茶翠屋のパティエシエをしている私の自慢のお母さん。

そのお母さんを手伝っているのは子は、家に居候している中国人と関西人のハーフの鳳蓮飛（ふおう れんふえい）ちゃんこと、レンちゃん。レンちゃんは、両親が海外赴任しているから家に下宿している私立海鳴中央の中学1年生で中国拳法の使い手なの。

1人称は私。

「お父さん。お母さん。レンちゃん。おはよう。」と挨拶する。三人は、

「なのは、おはよう。」

「なのちゃん、おはよう。」

と挨拶した。私は、

「お兄ちゃん達は？」と聞くと、お父さんが

「恭也と美由紀は道場で朝練している。」

と答え。レンちゃんが、

「晶は走りに行ってる。もうすぐ帰って来る。」

と答えた。私は、「お兄ちゃん達呼んでくる。」と言って離れの道場に向かいました。

道場では、お兄ちゃんとお姉ちゃんが練習していた。私はドアを開けながら、

「お兄ちゃん。お姉ちゃん。おはよう。もうすぐご飯だよ。」と言った。お兄ちゃん達

は、

「なのは。おはよう。わかった、すぐ行く。」と言った。

私のお兄ちゃんである高町恭也さんは、お父さんと同じ御神流剣術の剣士でお父さんの弟子の一人。とても優しい頼れる私のお兄ちゃん。

私のお姉ちゃんである高町美由紀さんは、お兄ちゃんと同じくお父さんの弟子で御神流剣術の剣士。かわいい物が好きで、私の自慢のお姉ちゃん。

お兄ちゃん達と話しながら道場を出るとちようどよく晶ちゃんが帰ってきた。

「晶ちゃんおはよう。」

「なのちゃんおはよう。それに師匠と美由紀さんもおはよう。」

「もうすぐご飯だからね。」

「了解。汗かいたから着替え来るね。」

「お兄ちゃん達も着替えてから?」

「そうする。父さん達には先に始めて良いと伝えてくれ。」

「分かった。お父さん達に伝えとくね。」

と言つて私はお兄ちゃん達と別れた。

晶ちゃんは、家のもう一人の居候で、本名を城島晶ちゃんと言つて空手やっているの。私立海鳴中央の中学二年生なの。晶ちゃんは、家の事情で居候しているの子でお兄ちゃんのことを師匠とよんでるの。一人称は俺。

着替え終わったお兄ちゃん達が合流して朝食が始まった。

晶ちゃんが、「なのちゃん、天宮兄弟はいつ泊まり?」と聞いてきた。私は、

「解らない。今日聞いて見るね。」

と答えた。するとレンちゃんが、

「そんなに勇吾に会いたいのかよ。晶は。」

と言つた。晶ちゃんは、

「そういうレンだつて勇我に会いたいだろ。」

と言つていがみ合いを始めた。

一方で、お兄ちゃんとお姉ちゃんは

「美由紀。リボンが曲がつてるぞ。」

「ありがとう。恭ちゃん。」

と仲が良さそうに会話して、お父さんとお母さんは、

「土郎さん、美味しい?」

「美味しい。腕をまた上げたね。」

とこつちも仲が良さそう。何か私だけ相手がない。なのははこの家では、皆から愛されている自覚があるけど何か微妙に浮いている感があるの。

私立聖祥大附属小学校に通うために、学校のスクールバスに乗ると、

「なのはちゃん。」

「なのは、こつちこつち。」

と二人の友達がいました。

「すずかちゃん。アリサちゃん。」

「おはよう。」

「おはよう。なのはちゃん。」

「おはよう。」

と挨拶した。そしてバスが動き出した。

アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんとは、一年生から同じクラスで、今年から同じ塾にも通っているの。

アリサちゃんは、両親が実業家で世界各地でアミューズメントパークを運営しているから、たまにしか家に居ないみたいで、家には執事の鮫島さんと沢山のメイドさんと生活しているの。大の犬好きなの。

すずかちゃんも、お父さんが月村重工の経営者でお母さんは月村建設の経営者だから、忙しい見たいで家にあまり居ない見たいで、お姉さんの月村忍さんとメイド長をしているノエル・K・エーアリヒカイトさんとノエルさんの妹さんですずかちゃんの専属メイドのフアリン・K・エーアリヒカイトさん達と生活しているの。

く昼食・屋上く

午前の授業後の昼食休憩で、学校の屋上で昼食をとっているの。メンバーは、私とすずかちゃんとアリサちゃんです。

「将来か。」

と言いながら私は弁当に入っていたタコさんウィンナーを食べた。アリサちゃんとすずかちゃんに向かって、

「アリサちゃんとすずかちゃんは、結構決まってるだよね？」と聞いた。アリサちゃんは、

「お父さんとお母さんは会社経営だしもつと勉強してしつかり後を継がなっちゃだし。」
すずかちゃんは、

「私は機械系が好きだし。工学系の専門職かな。」

と言った。私は、

「そっか。」

と言うしかなかった。その時、

「なのは、すずか、アリサ、遅れてごめん。」

「すいません。遅くなりました。」

と声をかけながら、二人の男の子が走ってきた。私は、

「まだ時間が有るから大丈夫だよ。勇吾君、勇我君。」

と言った。二人はクラスメイトの天宮勇吾君と一年生の天宮勇我君の天宮兄弟。

天宮勇吾は、去年私達のクラスに転校してきた子で、両親が仕事で居ない時は高町家に居候しているの。勇吾君は、倉嶋式格闘術と呼ばれる格闘技の使い手で、他にも私のお父さんから御神流剣術の流派の一つの真刀一刀御神流を習っているの、お兄ちゃんとお姉ちゃんの弟弟子なの。一人称は俺。

天宮勇我君は、勇吾君の弟で同じく倉嶋式格闘術と真刀一刀御神流を使うお兄ちゃんとお姉ちゃんのもう一人の弟弟子なの。また晶ちゃんとレンちゃんの料理の弟子なの。

1人称は俺。

私は、

「勇吾君は将来どうするの?」

と聞いた。勇吾君は、

「ナノテクノロジー系の研究者かな。」

と答えた。私は、

「工学系に進むのか。ちなみに勇我君は?」

と聞いた、勇我君は、

「子ども達にスポーツを教えてあげたいかな。」

と答えた。私は、

「皆すごいよね」と言ったら、アリサちゃんが、

「喫茶翠やの二代目じゃないの?」

と聞いてきたので、

「うーん。それも将来のビジョンの一つではあるんだけど、やりたいことあるような気がするんだけどそれが何か解らないの。私、特技も取り柄も特に無いし。」と答えた。する

とアリサが、「バカちん」と言いながらレモンを投げてきた。そして、

「自分からそういうこと言うじゃないの。」

「そうだよ。なのはちやんにしか出来ないことがきつとあるよ。」

「そうそう。俺たち兄弟が高町家のお世話になれたのはなのはちやんのおかげだよ。」

「そうですよ。なのはお姉ちゃん。」

と四人とも私を擁護してくれた。アリサちゃんが、

「大体あんた理数系の成績は、この私より良いじゃないの。それで取り柄が無いとはどの口がかく。」と言った。私は、

「なのは文系苦手だし。体育も苦手だし。理系の教科は勇吾君も良いし、それに社会なら勇吾君とアリサちゃんが上じゃない。」と言った。

く放課後く

放課後私達は塾に行くために、徒歩で向かっています。

「ねく今日のすずか、ドッチボール凄かったわね。」

「本当に凄かったね。」とアリサちゃんと私が誉めると

「そんなこと無いよ。」とすずかちゃんが答えた。

このとき、すれ違った犬に吠えられたアリサちゃんが、「Be quest」と言ったときは少し焦った。

「こつち。こつち。この道が塾への近道。」とアリサが言った。すずかちゃんは、「そんなの?」と聞いた。アリサは、「まーあ、道は悪いけど。」と言った。私はその道を進んだ。私はなんとなく見覚えがあった。私は「ここは、昨夜夢で見た場所だ。」と思った。ぼーとしていた私にアリサとすずかちゃんが、「どうしたの?」「大丈夫?」と聞いてきたから「大丈夫。ごめん、ごめん。」と言った。

しばらく話しながら歩いていると、どこからか「助けて」と声が聞こえた気がしたの。アリサちゃんが、「なのは?」と聞いてきた。私は「何か聞こえなかった?何か、声みたいもの聞こえなかった?」と二人に聞いた。二人は、「別に。」「小さい動物の鳴き声みたいのは聞こえたけど。」「この公園、リスとかイタチとかの小動物がいるからその鳴き声じゃないの?」と二人は言った。さらに周りを見渡しても誰も居ない。

その時再び「助けて。」と声が聞こえた。私は声の方向に走って行ってみると、そこには傷ついた小さな動物がいたの。とりあえず近くの動物病院に運んだの。

く近くの動物病院・榎原動物病院く

「怪我はそれほどでもないけど、かなり衰弱しているわね。きつと、ずつと一人ボツチだったんじゃないかな?」と院長先生はおっしゃった。私達とりあえず「ありがとうございませす。」とお礼をした。アリサちゃんが、「先生この子はフェレットなんですよね?」と聞いたけど先生は、「フェレットなのかな?かなり珍しい種類みたいだし。」と答えた

から、先生にも良く解らないみたいだし。この子は多分どこかのペットだと思う。首に宝石みたいな石を付いている紐が結んであるから。

その後この子が目を覚ました。でもすぐまた眠ってしまったの。その後塾に行った。

～夜・高町家の居間～

私は取り敢えず家で預かれないか皆に聞いてみたの。

「どういう訳で、そのフェレットさんを家でしばらく預かれないかな？」と私が聞くとお父さんが、

「フェレットか？うくん。ところでフェレットで何だ？」と言うもんだから私は机に倒れちゃった。お兄ちゃんとお姉ちゃんとお晶ちゃんが、

「イタチの仲間だよ父さん。」

「だいぶ前からペットととして人気の動物なんだよ。」

「俺の周りのやつもペットとして飼っている人もいますよ。土郎さん。」

と説明してくれた。お母さんが、

「フェレットで小さなわよね。」と聞いてきた。私は、「これくらい。」と腕を伸ばした。レインちゃんが、「そのくらいのサイズの子なんか。」と少し驚いていた。お母さんが、「そのくらいのサイズならカゴに入れられて、なのはがちゃんお世話できるなら良いかも。恭也・美由紀・レンちゃん・晶ちゃんどう？」とみんなに聞いてくれた。お兄ちゃん達は、

「俺は特にいぞんはないけど。」

「私も。」

「私も。良いよ。」

「俺も問題無いです。」

とみんな賛成してくれた。私は「みんなありがとう。」と言った。

↳夜・高町家なのは自室↳

私はフェレットを家で預かれることをメールで、すずかちゃんとアリサちゃんに伝え
た。

「アリサちゃん・すずかちゃん。あの子は家で預かれることになりました。明日学校帰りにいっしょに迎えに行こうね。なのは。」

「送信と。」

メールを送り終わったとき、再びあの感覚になり集中してみると、「聞こえますか? 僕の声が。聞こえて?」と聞こえた。この声は夢の中と昼間の声と同じ。そして再び、「聞いてください。僕の声が聞こえるあなた。お願いです。僕に少しだけ力を貸してください。お願い僕の所へ。時間が。危険がもう。」と聞こえた。私はベッドに倒れた。

↳夜・榎原動物病院↳

「お願い。届いて。」と念じるフェレット。外には赤い眼をした何かがいる。そして、

フェレットの前に現れた赤い眼の黒い怪物。臨戦態勢に入るフェレット。

病院に向かつて走る私。榎原動物病院に着いた私は突然耳鳴りに襲われる。周りの色が紫色に変わった。そして室内から聞こえる野獣のような唸り声。室内から外に逃げたフェレット。それを追う怪物。怪物の体当たりを回避して宙を舞うフェレットを驚きながら私はキヤツチした。私は「何？何？」と動揺していた。驚いていると、フェレットさんが「来てくれたの。」と話しかけてきたのでこつちにも少し驚いた。しかしすぐに、唸り声が聞こえたので我に帰った私はすぐに逃げた。逃げながら私はフェレットさんに聞いた。

「何が起きているの？」と聞くと、フェレットさんは、

「君には資質がある。僕に少しだけ力を貸して。」と答えた。私は、「資質？」と聞いた。そしてフェレットが自分のことを話し始めた。

「僕は、ある探し物のためにここでは無い世界から来ました。でも僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから迷惑だと分かっているんですが、資質のある人に協力してもらいたくて。お礼は必ずします。僕の持っている力をあなたに使って欲しいです。僕の力を。魔法の力を。」と言った。私はひきつりながら「魔法？」と言うしかなかった。その時、空からさっきの怪物が現れた。とっさに近くの電柱に身を隠した。フェレットが「お礼はしますから。」と言ったけど、「それどころじゃないでしょ。」とツツ

「コミを入れた。後ろでは怪物が動いていた。私が「どうすれば良いの?」と言うとフェレットさんが首の石を渡して来た。言われるがまま、手に持ってフェレットさんが言うように言った。」

「我。使命を受けし者なり。」

「我。使命を受けし者なり。」

「契約の下。その力を解き放て。」

「契約の下。その力を解き放て。」

「風は空に。星は天に。」

「風は空に。星は天に。」

「不屈の心は。」

「不屈の心は。」

「この胸に。」

「この手に魔法を。」

「レイジングハート。セットアップ。」

「Reigning heart. Standby, ready, setup.」

と言うと石が光だし、フェレットさんが「すごい魔力だ。」と言った。そして私に、「落ちていてイメージして。魔法を制御する魔法の杖を。そして君の体を守る衣服の姿

を。」と言った。急に言われた私はとにかく言われた通りイメージした。すると光に包まれて変身した。ただ目の前には怪物が。どうする私。…続く

第二話 「魔法の呪文はリリカルなの？」

「嘘。何？これ。」

と風にスカートをなびかせながら私は自身の変化に困惑しているの。ところが、すぐ後ろにあの怪物がいるの、

「え〜どうしよう〜！」

と私は後退りしたけどすぐに壁にぶつかった、その時に手に魔法の杖？が握っているのに気付いた。その時、ユーノ君が、

「来ます。注意して。」

と言ったので前を見ると怪物が飛び上がって、襲って来たの。反射的に杖を前に出すと、「Protection」と音声と共に目の前にピンク色の透明なバリアが現れた、そしてそれに怪物がぶつかり、強い衝撃と共に怪物を弾き飛ばした。怪物は衝撃でバラバラに四散した。四散した物は、壁等にズツサツツサと音をたてながら刺さっていた。余りの衝撃的な状態の変化に私は困惑して、「フェ〜。」と口に出すしかなかった。ユーノ君が、

「僕達の魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式

を発動させる必要なのは、術者の精神エネルギーです。」

と説明してくれた。その間も私は後ろを見ていた。続けて、ユーノ君が怪物について説明してくれた。

「そしてあれはは忌まわしい力の元で生み出された、思念体です。あれを停止させるには、その杖で封印して元の姿に戻さないといけません。」

「良く解らないけど、どうすれば良いの?」

「さつきみたいに、防衛・攻撃魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要です。」

私が「呪文?」と聞くと

「心を澄まして、心の中にあなたの呪文が浮かぶ筈です。」

とユーノ君が言うので、言われた通りに心を澄まして集中する。直後、さつきの怪物が再び襲ってきた。私は、杖を構え「プロテクション」と念じ怪物の攻撃を防いだ。怪物は驚いたように唸り声を上げながら体を起こした。私は、

「リリカル。マジカル。封印すべきは忌まわしい器、ジュエルシードを封印。」

と叫び、レイジングハートが、

「Sealingmodo, setup!」

と音声が入り、変形し杖より放たれたリボンのようなものが、怪物の体に巻き付き額

にはローマ数字の、「21」が出現した。私は、レイジングハートの「Standby, Ready.」の音声が続いて、

「リリカル。マジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印。」

と叫び、レイジングハートから、「Sealing.」の音声と共に再びリボンのようなものが怪物を覆い尽くした。その後、光る石に変わった。ユーノ君が、

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れて。」

と言った。私は、言われた通りにレイジングハートで触れると、レイジングハートの中に「Receive, Number 21」の音声と共に入って行った。その後、私の変身が解けてレイジングハートも元の赤い石に戻った。私は、

「あれ?終わったの?」

と呟くとユーノが「ありがとう。あなたのおかげで。」

と言いながら倒れしまった。私は、「大丈夫?」と言いながら、ユーノ君を抱えようとすると、遠くからパトカーのサイレンが聞こえたので、周りを確認しながら、

「もしかしたら私、ここに居ると大変アレなのでは。」と思い。「ごめんなさい。」と言いながらユーノ君を抱えてこの場から離れた。

とある公園

私はとある公園のベンチに座っていた。息を整えていると、ユーノ君が、弱々しい声

で「すいません。」と言った。私は、

「ごめんね、乱暴で。起こしちゃったね。怪我痛くない？」

と聞くと、ユーノ君は、

「怪我は大丈夫です。ほとんど治っているから。」

と言いながら体を揺らすと包帯がほどけた。私が確認してみるとほとんど痕がなかった。私が「凄い。」と言うと、ユーノ君が、

「あなたのおかげで残った魔力を治療に使えましたから。」

と言ったが、私には良くわからなかった。取り敢えず私は自己紹介をする事にした。私は、

「私の名前は高町なのは。小学3年生。家族とか仲良しの友達は、なのはって呼ぶよ。」

と自己紹介をした。ユーノ君が、

「僕の名前はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です。」

と自己紹介してくれた。私は、

「ユーノ君て言うんだ。可愛い名前だね。」

と言った。ユーノ君が、「すいません。あなたを。」

と言ったけど私が、「なのはだよ。」と言うとユーノ君が「なのはさんを巻き込んでしまつて。」と言った。私は、「あの。その。」と口ごもりながら「私大丈夫だよ。」と答え

た。その後、私は「ユーノ君怪我しているだし。ここじゃ落ち着かないよね。取り敢えず私の家においでよ。後のことはこれから考えよう。」と言つて帰ることにした。

く高町家く

私は物音を立てないように、そーとと門扉を開けて玄関に向かい、扉にてを掛けようした時に横から、「お帰り。」と声がした。慌ててユーノ君を隠して声の方を向くと、お兄ちゃんが立っていた。お兄ちゃんは、少し怖い顔で、「こんな時間に何処にお出かけた。」と言つた。私が動揺しながら「あの…その…えくと…。」と言つてみると、後ろから「あら可愛い。」と声がした。私は振り返りながら「お姉ちゃん。」と言つた。お姉ちゃんはユーノ君を見ながら「何か?元氣ないね?」と言いつつ「なののは、この子が心配で様子を見に行つてたんだね。」言つてくれた。お兄ちゃんは少し呆れながら「わからんでもないないが。たがら言つて内緒では、いけないな。」と言つたが、お姉ちゃんが「良いじゃない。こうして無事に戻つて来たんだから。それになのは良い子だからもうこんなことはしないもんね?」と庇つてくれた。私は取り敢えずお兄ちゃんに、「お兄ちゃん。勝手に出掛けて心配かけてご免なさい。」と言つた。お兄ちゃんは何も言わなかつたが微笑を浮かべており、お姉ちゃん「良かったね。」と言つてくれた。

その後お姉ちゃんはユーノ君を手に持ちながら、「可愛い動物ね?母さんなら、可愛い過ぎて悶絶しちゃうじゃない?」と言ひ、お兄ちゃんも「その可能性は否定出来ないな。」

と言った。

く海鳴市のどこかの神社く

石段の一番上にある鳥居の下で何か光っていた。

く高町家く

私はいつもように、スマートフォンのアラームで目を覚ました。私はカーテンを開けて、ユーノ君に「おはよう。」と言うと、ユーノ君は「あの……その……おはよう。」と返してくれた。私は「取り敢えず、夕べはお疲れ様。」と言い、ユーノ君は「こちらこそお疲れ様。」と返してくれた。私はユーノ君に微笑みながら、昨日ユーノ君をお父さんやお母さん、晶ちゃんやレンちゃんに紹介した時のことを思い出していたの。

く昨日高町家・リビングく

ユーノ君を紹介したらお母さんがユーノ君を手の中に包むように持ちながら頬にすりすりしながら、「可愛い。本当に可愛い。」と言って興奮していた。お兄ちゃんとお姉ちゃんと言った通りになっている。さらにお母さんは「可愛い可愛い」と言いながらユーノ君を左右に揺らしていた。お父さんはその光景を見て微笑んでいた。私と晶ちゃん・レンちゃんは口々に、

「お母さん。程々にしてね。」

「桃子さん。次は俺に抱っこさせて下さい。」

「本当に可愛いなく。」

と言った。お父さんが、

「なかなか賢そうなイタチ? だな。」

と言った。お兄ちゃんがため息を付き、お姉ちゃんが「フェレットだよ。お父さん。」と言った。お父さんはユーノ君を見ながら、「何か芸見たいなこと出来ないのかな? お手。」と言いながら手をユーノの前に出した、するとユーノ君がお父さんの手に手を乗せた。お父さんとお母さんが「凄いなー。」言い沢山撫でていた。晶ちゃんとレンちゃんが「抱っこしたい。」と言っていた。その後は、ユーノ君のご飯とかの話になっていた。晶ちゃんとレンちゃんはその後ユーノ君を抱っこしていた。その時の様子は、ユーノ君にデレデレだった。

第三話 「これからの覚悟と新たな来訪者なの」

（現在の高町家・自室）

私は昨日はユーノ君のことをあまり聞けなかったから今少し聞いていた。私はユーノ君に「名前で呼ぶこと馴れてくれた？」と聞いた。ユーノ君は「うん。なのは。」と答えてくれた。私は学校に行く時間になったのでよユーノに、

「ユーノ君。私学校に行かないといけないから、帰って来たら色んな話しをしてね。」

と言ったら、ユーノ君が、

「それは大丈夫だよ。話しなら、離れていても話しは出来るよ。」

と言った。私は「ふうえ。」と言ったらユーノ君が頭の中に「なのは、もう魔法使いなんだからね。」と話しかけて来た。この感覚はユーノ君が私を呼んだ時と同じ感覚だ。ユーノが

「レイジングハートを手に持って、僕に心で語りかけてみて。」

と言ったので、私は「えくと。」と言いながらレイジングハートを手に取り、自分の胸のところにレイジングハートを置きながら「こう？」と念じてみた。ユーノ君は「簡単でしょ？」と返してくれた。私は「本当だ。」と興奮していた。ユーノは

「空いている時間に僕のこととか、魔法のこととか、ジュエルシードのことなどを話すよ。」

と言った。その時私はレイジンググハートを見ていた。

　　私立聖祥大附属小学校

「おはよう！」

「なのは。昨夜の話、聞いた？」

「昨夜って？」

「昨日行った病院で車の事故か何かあったらしくて、壁が壊れちゃったんだって。」

　　と私が教室に入るなり、アリサちゃんとすずかちゃんの話しかけて来たの。私は内心

「私その場にいたから、原因知っているんだけど。」と思っていた。

　　アリサちゃんが、

「あのフェレット。無事だと良いんだけど？心配で。」

　　とユーノ君のことを心配していたので、私は、

「その件は。その…。」

　　と私の家に居ることを伝えた。二人は、

「そっか。無事で、なのは家に居るのか。」

「でも凄い偶然何だね。たまたま逃げ出していたあの子と道でばったり会うなんて。ね

く。」

と喜んでいた。だけど私は「嘘はついて無い。嘘はついて無い。ちよつと、ちよこつと真実をばかしただけ。」と少し罪悪感を感じていたのだった。苦笑いを浮かべている私に二人は不思議そうだった。その時に後ろから、

「なのは。アリサ。すずか。何話しているの?」

と声が聞こえた。声の主は勇吾君だった。アリサちゃんが、私の家でフェレットを保護していることを説明すると、話を聞きたいみたいだった。私が、

「あの子、飼いフェレットじゃないみたいで、当分の間、家で預かることになったの。」

と言うと三人は、

「飼われていたフェレットが逃げ出したわけでは無いのか。珍しい。」

「そうなんだ。」

「なのは良かったじゃない。」

と言っていた。アリサちゃんか、

「名前付けてあげなちゃ。もう決めてる?」

と聞いて来たから私は、

「うん。ユーノ君って名前。」

と言った。三人は、

「ユーノ君って名前にしたんだ。」

（授業中）

私は授業を聞きながらユーノ君と念話をしていた。ユーノ君は、

「ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は手にした者の願いを叶える、魔法の石なんだけれど。力の発現が不安定で、昨夜みに単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もある、たまたま見つけた人や動物が間違つて使用してしまつて、それを取り込んでしまうことがある。」

「そんな危ないものがどうして家の御近所に？」

「僕のせいなんだ。僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中であれを発見して調査団に依頼して保管してもらつただけど、運んでいた時空間船が事故か人為的災害に遭つて、30個のジュエルシードがこの世界に散らばつてしまつた。今まで見つけられたのはたった二つ。」

「後28個かく。先は長いね。」

と念話をしていると私はあることに気づいた。私はユーノ君に、

「あれ？ちよつと待つて。話を聞く限りでは、ジュエルシードが散らばつたのつて、全然別にユーノ君のせいでは無いんじゃない？」

と念話を送ると、ユーノ君は、

「だけどあれを見つけてしまったのは僕だから、全部見つけてちゃんと在るべき場所に還さないと駄目だから。」

と返してきた。私とユーノ君は、

「なんとなく。なんとなくだけど、ユーノ君の気持ち解るかもしれない。真面目なんだね？ユーノ君は。」

「え!?とにかく、えくと昨夜は巻き込んでごめんね。助けてもらって、本当に申し訳ないんだけど。僕の魔力が戻るだけの間、ほんの少し休ませてもらいたいだけなんだ。1週間いや5日間もあれば力が戻るから。それまで。」

「戻ったらどうするの?」

「また1人でジュエルシードを探しに出るよ。」

「それは駄目。」

「駄目って。」

「私、学校と塾の時間は無理だけど。それ以外の時間は手伝えるから。」

「だけど。昨日みたいな危ないこともあるんだよ。」

「だって、もう知り合っちゃったし。話も聞いたっちゃったし、ほっとけないよ。それに昨夜みたいなことが、御近所で度々あつたら、皆さんのご迷惑になっちゃうしね。ユーノ君ひとりぼっちで、助けてくれる人居ないんでしょ?ひとりぼっちは寂しいもん。私にもお

手伝いさせて、『困っている人が居て、助けてあげられる力が有るなら、その時は迷っちゃいけない』って、これ家のお父さんの教え。」

と念話をした。

ユーノ君との念話が終わった頃、アリサちゃんが私の髪を軽く引ぱった、私は軽く慌ててしまった。すずかちゃんは笑っていたけど。近くに勇吾も来ていた。アリサちゃん、

「なのは達。授業中に動物の声聞こえなかった？」

と聞いてきた。私は、

「聞こえなかったけど。」

と答えた。だけど、勇吾君とすずかちゃんは、

「聞こえた。何か頭に直接聞こえた気がする。」

と答えた。私は驚きつつ、「気のせいだよ。」と言った。

く海沿いの道路く

私は、アリサちゃん・すずかちゃん・勇吾君・勇我君の四人と一緒に帰っていた。ユーノ君に念話で「ユーノ君は困ってて、私はユーノ君を助けてあげられるだよ。魔法の力で。」と言った。ユーノ君は「うん。」と答えた。そして、アリサちゃん達と分かれながらユーノ君と念話をしていたの。

「私、ちゃんと魔法使いになれるかどうか余り自信ないけど。」

「なのはは、ちゃんと魔法使いだよ。多分僕なんかより、ずっと才能がある。」

「そうなの？自分では良く分からないけど。とりあえず、色々教えて。私頑張るから。」
「うん。ありがとう。」

「さて、もうすぐ家に着くよ。とりあえず一緒におやつを食べようか。」

「あ。うん。ありがとう。」

と4人と途中で別れて商店街のウインドウを覗きながら帰っていたの。

私が「今日のおやつは何かな？」と考えていると、突然あの感覚に襲われた。私は空を見ながらユーノ君に、「ユーノ君今のつて。」と念話を送るとユーノ君は、「新しいジュエルシードが発動している。すぐ近く。」

と答えた。そして私達、

「どうしたら?」

「一緒に向かおう。手伝って。」

「うん。」

と会話してジュエルシードが発動した場所に向かった。

くジュエルシードが発動した神社く

神社では赤い目を持つ四つ目の狼みたいな生き物がランニング中の女性を襲おうと

していた。

私達は階段を駆け登りながら、ユーノ君が

「なのは、レイジング・ハートを。」

と言い、私は「うん。」と言いながら手に取った。階段を上がった先には狼みたいな生き物がいた。近くにお姉さんが倒れていたが、どうやら気絶しているだけみたいだった。

ユーノ君は「現住生物を取り込んでいる。」と言い、

私は「どうなの？」と聞いた。

ユーノ君は「実体がある分手強くなる」と言っただけど、私は一歩前に出て「大丈夫。多分。」と答えた。ユーノ君が「なのは、レイジング・ハートの起動を」と言った。

私は「起動って何だけ？」と起動方法を忘れてしまつて考えるポーズを取っていた。この時ユーノ君は尻尾が立てて驚いていた。

その時狼みたいな生き物が私に向かって突っ込んできた。ユーノが私の肩に乗り、『我は使命を』から始まる起動パスワードを」と言った。狼みたいな生き物は真っ直ぐに向かつて来るのを見ながらユーノ君に「あんな長いの覚えてないよ。」と言った。ユーノ君は慌てながら「もう一回言うから繰り返し返して。」と言った。私が「わかった。」と言った時狼みたいな生き物が私に襲いかかろうとした時レイジングハートが光り出し、

私が驚きながら「レイジングハート？」と呟くとレイジングハートが「Standby, ready, setup」

の音声と共に杖に変わったの。それを見たユーノ君は驚きながら「パワード無しで起動させた」と呟いていた。

その時狼みたい生き物が突っ込んできた、ユーノ君が「なのは防護服を。」と言った、私は「ふえ〜」と変な声を出しながらレイジングハートを前に出すと、レイジングハートが

「Barrier Jacket」

の音声のあとに光り出し、バリアみたいなのが出現した。直後に狼みたいな生き物が突撃してきた。

ユーノ君が心配そうな声で「なのは！」と私に声をかけてきた、私は軽く息を吐きながらバリアジャケットを纏った状態で座っていたが、目の前の鳥居の上に狼みたいな生き物があり、そのまま突撃してきた。

私が杖を前に出すと、さっきと同じようにピンク色のバリアがレイジングハート「Protection」の音声と共に出現した。そして狼みたいな生き物は倒れてしまった。

〜その様子を見ていたユーノ〜

「あの衝撃をノーダメージで防ぎきるなんて、何って才能だ」と内心考えていたのだ。
く戦闘中のなのはく

私は「いててく。ことは無いかな？」と言いながら目を明け、レイジングハートに
「封印っていうのすれば良いかな？レイジングハートお願い。」

と言うと、レイジングハートが

「Searing mode. Setup.」

と答えてくれた。レイジングハートを構えながら私は、

「リリカル。マジカル。ジュエルシード、シリアル30」

と唱えるとレイジングハートから出現したピンク色のリボンが狼のような生き物を
包み込んだ。そして狼のような生き物はジュエルシードに戻っていた。そのままジュ
エルシードはレイジングハートの中に収納された、レイジングハートの「Receive,
Number30」と共に。

く戦闘後のなのはとユーノく

ジュエルシードを封印し終えた私はユーノ君に、

「これで良いのかな？」

と聞くと、ユーノ君が何故か少し驚いた様な声で、

「うん…。これ以上無いぐらいに…。」

と答えてくれた。それを聞いた私は微笑んだ。

その後私達は、気絶していたお姉さんが目を覚まして帰って行くの見ながら、

「お疲れ様かな？」

「うん。そうだね」

と会話していたの。私は心の中で、「新しい友達のユーノ君の事とか、魔法の事とか、色々頑張らないとなく。」と考えていたのでした。

私はユーノ君に、

「おなか空いたからそろそろ帰ろうか？ユーノ君。」

と言い自宅にかえるのでした。

く高町家・居間く

高町家では、いつものように何気ない会話をしながら夕食を取っていたが、いつもと違うのはフェレットが居ることぐらいだった。ある程度食事が進んだ時になのはが思い出した様に、

「みんな。勇吾君と勇我君が泊りに来る日付は、まだ分からないみたい。」

と言うと、みんな「わかった。」と言った。続けて私は、

「それから、お兄ちゃん。お姉ちゃん。明日二人が練習に来るって。」

と言うと、お兄ちゃん達は、

「そうか。ちようど良かった、明日は大学が昼までだから。なら明日までに練習メニユー考えないと。何が良いかな？父さん。」

「食べ終わったら後で、ゆっくり考えよう恭也。美由紀も手伝ってくれ。」

「了解。お父さん（やったー！可愛い弟分に会える。）。」

「二人が来るのか（よっしゃー！可愛い弟分、特に勇吾に会える）。そういえば、二人は夕食はどうするんだろう？レン、どう思う。」

「確かにそこは、気になるところやなく（私としては二人に、特に勇我に）。どうなん？なのちゃん？」

と喜んでいた。確かに晶ちゃんとレンちゃんの疑問は気になるから私は、

「多分、食べると思うよ。明日聞いてみるよ。」

と答えた。

く高町家・自室く

夕食の後にお風呂に入ってパジャマに着替えた私は、何となくユーノ君と窓から空を見ていたの。

「ユーノ君の故郷はどんな星空が見えるの？」

「こつちと余り変わらないかな。」

「そうなの？ユーノ君。後ね、この世界ではね流れ星が消える前までにお願いを言い終

えると叶うと言われているの。」

「そうだよ。なのは。ただ僕の部族だと流れ星は悪いことの前触れだとされているんだ。」

その時流れ星が降って来たのだった。それを見た私達だったが、私の「ユーノ君大丈夫だよ。」の一言でユーノ君を安心させたの。

この時流れ星が近くの山に落ちたことに、二人は気づいていなかった。この流れ星が後になのはに影響を与えるとは二人は思ってもいなかったのだった。

く海鳴市・流れ星が落ちた場所く

流れ星が落ちた場所には小さなクレーターが出来ていた。その中心には一人の銀髪の少年が立っていたのだった。少年は、

「転移完了。さくて、ロストロギアを探すとするか。」

と言いながら少年が歩き出そうとしたとき、少年が、

「ヤバイ。魔法が上手く使えない。まさかこの世界が姉さんが言っていた世界か。仕方ない。慣れるまで、今の所は使える僅かな魔法で情報を集めるか。」

と言い、何か唱え始めた。少年が、

「我が身よ。大空を舞う鳥となれ。」

と唱えると少年の体を灰色の光が包みこんだのだった。

第四話「魔法少女の日常なの」

～昼・学校の屋上～

私達はいつものように、屋上のベンチに座りながら昼食を食べていました。私は放課後のことを勇吾君達に聞きました。

「ね～勇吾君と勇我君？今日家に来るじゃない？お兄ちゃんとお姉ちゃんに剣の稽古をつけてもらうために。その時夕食を家で食べて帰る？」

「どうしようかな。確かに今日は親が二人とも遅いから、コンビニの弁当で済まそうと思っていたからな。勇我はどっちが良い？」

「俺はなのはお姉ちゃん家で食べたいかな。それに勇吾もそのつもりだろう。」

「まくな。それじゃなのはの家で食べることにするよ。」

「と言う話になり、更に私はアリサちゃんとすずかちゃんに、
「二人もどう？何か用事が無ければだけど。」

と聞くと、

「今日は何も無いから、私は行くわよ。すずかはどうする？」

「私も何も無いから行くよ。多分お姉ちゃんも行くと思うから、アリサちゃん。迎えに

行くから時間をメールしてね。」

と二人とも来るようになった。その後は何気ない会話して過ごしたの。

〜放課後・高町家リビング〜

私は家に着くなり、リビングに居たレンちゃんと晶ちゃんに、

「レンちゃん。晶ちゃん。今日の夕食は勇吾君と勇我君だけじゃなくて、アリサちゃんとすずかちゃんと忍さんも来るみたいだよ。」

と言ったの。二人は、

「これは腕によりをかけて作らないといかんな〜。」

「今日は師匠にとつて、良い日じゃん。」

とそれぞれ別の反応をしていた。

その後二人が夕食の買い出しに出かけたため、ユーノ君とテレビを見ていたの。その時ドアが開いて、お兄ちゃんとお姉ちゃんが入って来たの。

「なのは。お帰り。二人は?。」

「晶ちゃん達は買い物に出かけたよ。それから勇吾君達は着替えてから来るみたい。後ね、二人は食べて帰るみたいだし、今日はアリサちゃんにすずかちゃんと忍さんも来るみたいだよ。」

「そうなんだ。良かったね。恭ちゃん、忍さんが来てくれて。」

「うるさい。そうか勇吾達は着替えて来るのか。」

と話していると玄関の方から勇吾君の声が聞こえた。お兄ちゃんが玄関に向かったの。

着替えてきた勇吾君達は、荷物を泊まる時に使っている部屋に置くとお兄ちゃん達と一緒に道場に行ったの。私は自室で学校の宿題をやっていて、終わった時に丁度良く晶ちゃん達が帰ってきた。私は私服に着替えてユーノ君を連れ、一階に降りて晶ちゃん達に勇吾君が来た事とちよつと散歩に行くことを伝えたの。理由は勿論ジュエルシードを探しに行くために。

～海鳴市某所～

私達は反応がないか探していたの。その時レイジングハートが反応したので、その方に行くのとビルとビルの間でジュエルシードが起動したところだった。運良く周りにはあまり人が居なかった。その時ユーノが

「なのは。あまり人が居ないけど、一応結界を張るからね。後はお願い。」

と言ったもんだから驚きながらも、

「結界？とりあえず、任せて。レイジングハート、セットアップ。」

と返事をしながらレイジングハートを起動してバリアジャケットを展開したの。ユーノ君が何か唱えた始めたの確認しながら私はジュエルシードに因って生まれた怪

物を見たの。その怪物は蜘蛛のような形をしていた。私はユーノ君に、

「前と同じタイプかな？ユーノ君。」

と聞くと、ユーノ君は、

「多分そうだと思う。」

と返したの。私はレイジングハートを前に出しながら右足を半歩前に出した。直後に蜘蛛が襲ってきたけど、私は冷静にバリアを出して空に打ち上げて、

「レイジングハート。お願い。」

と叫んだ。そしてレイジングハートが前回と同じように、

「Sealingmodo, Setup.」

の音声の後の私の「リリカル。マジカル。ジュエルシード、シリアル25。封印」の声と共に封印してくれた。そしてゆっくりとジュエルシードが落ちてきたので、そのままレイジングハートで触れて、「Receive, Number25」の音声と共に中に収納された。

くジュエルシード封印後のユーノく

僕はなののが簡単に封印したのを見て思わず、

「なのは。やっぱり凄い才能を持っている。特に状況判断能力が鋭いな。」

と眩しくなかった。

くジュエルシード封印後ののはく

私は「ふく」と息を吐きながら、

「何とか封印できた。今回は前回より手ごたえがなかったかな？」

と安堵したの。そして足元に蜘蛛が載った本が落ちていることに気が付いた、私はその本を見ながらユーノ君にあることを聞いた。

「ユーノ君？ 今回のつて、思念体がこの本を吸収していたのかな？」

「確かにその可能性はあるよ。僕もすべてを理解しているわけではないから。でもなのは、それを簡単に封印したんだからすごいよ。」

「I thought so, too. (同感です。)」

「にはははく。そんなことないよー。レイジングハートの力だよ。それより帰ろうか。」
「うん (Yes)。」

気になることをユーノ君に聞いただけなのに、ユーノ君とレイジングハートに褒められて恥ずかしいな。取り敢えず家に帰るの。

く高町家く

私はユーノ君を肩に乗せながら門扉を開けて中に入り、離れの道場に向かったの。

く高町家・道場く

道場の前に着くと中から木刀がぶつかり合う音が聞こえたの。私が開いているドア

から顔を入れると、近くにお姉ちゃんと勇我君が正座をしていて、真ん中ではお兄ちゃんと勇吾君が刀を交えていた。私が入っていることを気配で察しついていたのか、木刀を下ろしてこつちを見て、

「なのは。お帰り。」

「なのは（お姉ちゃん） 出かけていたのか（ですか）？」

とお兄ちゃん達が話しかけてきた。私はとりあえず、

「ただいまー！お兄ちゃん、お姉ちゃん、勇吾君、勇我君。ちよつと散歩に行つて来たの。」

と答えた。私はお兄ちゃん達に、

「稽古いつまでやるの？お風呂を入れようか？」

と聞くと、お兄ちゃんは、

「そうだな？今5時半だから、後30分ぐらいかな。お風呂入れといてくれ。」

と答えたの。私は「了解。」と言いながら家に向かったの。

く高町家・リビングく

私はお風呂を入れて待つっていると、30分ぐらい経つた頃お兄ちゃん達が稽古から帰つて来たの。お兄ちゃん達は、

「疲れた。やつぱり恭兄ちゃんや美由希姉ちゃんの足元にも及ばない。勇我もかなり

上達しているから負けられないようにしないと。」

「いやいや、俺は勇吾をまだまだ越えられないよ。練習をもっとしないと。」

「練習はほどほどにしないとダメだよ。勇我君。それから勇吾君は、上達は確実にしているからね。そうだよな？ 恭ちゃん。」

「あゝ。そうだな。確実に二人とも上達しているから、焦る必要はないぞ。ただ恐らく同世代とは、身体能力がかけ離れ始めてるだろうから、そこは注意しろ。」

と話しながら居間に入ってきたの。私がお風呂が入っていることを伝えた。お兄ちゃん達は順番に入るみたいだけど、どうやら勇吾君と勇我君はお姉ちゃんに入るみたいで、何か二人とも強引に連れて行かれたみたいだけど。

お兄ちゃん達がお風呂から上がって、今日の反省をしているの。勇吾君と勇我君は顔が赤いけど。

それから少したったところ玄関のチャイムが鳴ったの。私が出ると、そこにはアリサちゃんにすずかちゃんとお姉さんの月村忍さんが立っていたの。私は、

「いらっしやい。アリサちゃん、すずかちゃん、忍さん。」

と挨拶したの。三人は、

「二なのは（ちゃん）。誘ってくれてありがとうね。」

と言い、一緒にリビングに行ったの。

私達はその後、他愛無い話をしながら夕食までの時間を過ごしていたの。夕食が近づくと私達は居間に行つて、晶ちゃん・レンちゃん・勇我君が作った料理を机に並べたり、箸やコップを出して並べたの。アリサちゃんや、すずかちゃん・忍さんは、本当なら手伝ふ必要は無いんだけど「夕食をご馳走になるんだから、これぐらいはするよ。」と言つて手伝つてくれているの。いつも。

く高町家・居間く

私達は居間に集まつて、お父さんとお母さんが帰つてくるのを待つていたの。その後、お父さん達が帰宅し、ワイワイ喋りながら夕食を取りながら、お姉ちゃんは勇吾君と勇我君の上達具合をお父さんに話していたり、お兄ちゃんは忍さんと話していたり、勇吾君はアリサちゃんと晶ちゃんと話していたり、勇我君はすずかちゃんとレンちゃんと話していたり、私はユーノ君を撫でているお母さんと話していたの。

く高町家・門扉前く

夕食を食べ終わり、アリサちゃん・すずかちゃん・忍さん・勇吾君・勇我君が帰る時間になつたの。家の前には忍さんの赤色の高級車が停まつているの。アリサちゃんは忍さんの車で送つてもらふことになり、勇吾君と勇我君はお兄ちゃんが家まで送ることになつたの。二人は最初は忍さんが送る予定だったんだけど、アリサちゃんとはすずかちゃんの家の方向とは反対だし、二人の家はここから近いから二人で歩いて帰るつもり

だったみたいだけど、流石に小学生二人で帰るには遅い時間だからお兄ちゃんが付き添うことになったの。

私達は

「なのは（ちゃん）。ごちそうさまでした。また学校でね。」

「お邪魔しました。恭也君、また大学で。」

「うん。またねー。アリサちゃん・すずかちゃん・勇吾君・勇我君。」

「あー。じゃあな、忍。ちゃんとアリサを送れよ。」

と言って別れたの。

（高町家・なのはの自室）

私はアリサちゃん達が帰ってから少し経ってからお風呂に入ったの。部屋に戻ってからユ一ノ君と今日のことを振り返って、そのまま布団に入って寝たの。

第五話 「なのはの素質と実力なの」

く海鳴市・住宅地く

私はいつものように学校に行つて、今日は塾もあつたの。その帰りにジュエルシードの反応があり、その方向に向かうとそこには、ウサギのような生き物がいたの。いつも通り私はレイジングハートを構えながら、

「リリカル。マジカル。ジュエルシード、シリアル23。封印。」

と言つて封印したの。

く高町家・自室く

私は自室で、ユーノ君と今日の反省をしていたの。ユーノ君は苦い顔をしながら、「怖いぐらいに簡単に四つ目のジュエルシードが封印できたんだけど…。」

と言つていたの。私が、

「ユーノ君。簡単に封印できるなら、それに越したことはないんじゃないの?」

と聞くと、ユーノ君は少し考えながら、

「上手く行き過ぎているから少し気になるんだよ。」

と答えてくれたの。私が「気にし過ぎだよ。」と言うと納得したのか、ユーノ君は「気

にし過ぎかな。」と呟いていたの。その後私達は、

「なのは、身体大丈夫？疲れていたりしない。」

「大丈夫だよユーノ君。本当にユーノ君は心配症だよ。特に疲れている感覚はないから。心配してくれてありがとうね。」

「大丈夫ならいいんだけど。兎に角もう遅いから寝よう。なのは。それじゃおやすみ。」

「うん。おやすみなさい、ユーノ君。」

と少し会話して寝たの。

ユーノは籠の中で丸くなりながら、「なのはの戦闘センスは目を見張る物がある。しかしこんな平和な世界で、普通の女の子のなのはが高い戦闘センスを持っていることはどういうことだろう?。」と考えていたが、そのまま夢の世界に落ちていった。

く海鳴市内の公園く

昨日に引き続きジュエルシードの反応があり、私達が反応を辿るとこの公園からだったの。カプトムシ型に変化したジュエルシードがそこにはいったの。私はユーノ君に、「ユーノ君、半球状の結界張れる?張れるならお願い!」

と言うと返事を待たずに走り出したの。ユーノ君は少し驚きながら、

「うん。出来るけど。って聞いてないし!!なのは。」

と言っていたの。その後ユーノ君がすぐに結界を張った。

〈結界内〉

私は結界が張られたことを確認すると、飛翔してカブトムシの前に出るとわざと追われる様に動き、角が当たらないギリギリの距離を保ちながら飛び回っていたの。そして地面から突き上げるように結界の一番高い所に向かい、ユーノ君に「ちゃんと踏ん張ってね、ユーノ君！」と念話を送ると同時に結界の天井を蹴って斜めの方向に方向転換したの。追って来ていたカブトムシは結界にぶつかって墜落していったの。私は墜落していったカブトムシを見ながらレイジングハートを構えて、

「レイジングハートお願い。」

「Sealing mode, Setup。」

「リリカル。マジカル。ジュエルシード、シリアル19。封印。」

と言って封印して元に戻ったジュエルシードに近づきレイジングハートを向けて、

「Receive, Number 19」

の音声と共に中に収納したの。

ジュエルシードを封印し終わった私はバリアジャケットを解除しながらユーノ君の方を見ると、ユーノ君は固まっていたの。私が「ユーノ君？」と言うと、ハツつとした顔をして「何でもないよ。」と答えたの。私はユーノ君の反応を不思議に思いながらユーノ君と、

「ユーノ君。帰ろっか。」

「そうだね！なのは。お疲れ様。」

と会話したの。その後ユーノ君が結界を解除して家に向かったの。その時に視線を感じて周りを見渡したの。ユーノ君は私のその動きに驚いて、

「なのは、どうしたの？何かあった？」

と聞いてきたの。私は視線を感じたことを伝えて二人で見渡したけど、木の上に鴉が一羽いるだけだったの。ユーノ君は「気のせいだよ。」と言ってくれて私も気のせいだと納得したの。その後私達は、他愛の無い話をしながら帰ったの。

この時のなのは達は鴉がずっと見ていたことに気づいていなかった。

く公園の木の上の鳥く

木の上の鴉は「あの二人、中々上手く戦えているな。特にあの栗色の女の子の方は、かなり高いポテンシャルをもっているな。フェレットみたいな方は俺と同じく動物に変身しているな。この二人の近くに居れば、素質のある人物に巡り会えるかな。」と考えながら飛び立っていた。

く高町家・なのはの自室く

私達は帰宅して夕食を摂って、部屋で今日の反省会をしていたの。ユーノ君と私は、「なのはお疲れ様。身体大丈夫？疲れてたりしない？」

「大丈夫だよ。ユーノ君。少し疲れているけど、寝たら回復するよ。」

「なら良いけど……。とにかく無理は禁物だからね。」

「わかってるよ。本当にユーノ君は心配症なんだから。」

と反省会を終了したの。その後は、他愛のない話をしていたの。その時に私はジュエルシードを封印した後のユーノ君の反応が気になっていたので聞いてみたの。

「ねーユーノ君。さっきはどうしたの？固まっていたけど？」

「うん。なのはの判断能力に少し驚いただけなんだ。心配してくれてありがとう。なのは。」

「そうだったんだね！あの時はただ閃いたことを実行しただけなんだよね。実はね、にははは。」

「そうなの？！ってつきり計算して突っ込んだんだと思っていたよ。」

少し会話して、ユーノ君が固まっていた理由が分かったの。この後、私とユーノ君は自分のベットに入ったの。

ユーノは籠の中で丸くなりながら、「やっぱりなのはは、高い戦闘に関する素質を持っている。今までは、状況判断能力が高いと思っていたけどそれだけで無く、その他の能力も目を見張る物がある。本当になのはは何者なんだろう？」と考えながら夢の中に入っていた。

く高町家・近所・朝く

学校に向かうなのはを空から眺めている一羽の鴉がいた。その鴉は授業中もものを見ていたが、帰る時にはどこかにいなくなっていた。

く海鳴市・私立風芽丘学園・夜く

私達はジユエルシードの反応を追っていてある場所に着いたの。その場所は、

「うそ〜。くくお姉ちゃんを通ってる高校じゃないの!」

そう、お姉ちゃんを通っている高校だったの。でもどうやらもう誰もいない様だった。そして今ジユエルシードが変化した物が目の前に現れたの。その姿はクワガタそのものだった。私はユーノ君に念話を送ろうとした時にユーノ君から「昨日と同じ様に半球状の結界張るよ!」と念話が送られてきたの。私はユーノ君の方に顔を向けて首を縦に振ったの。そしてユーノ君結界を張るのと同時に戦闘が開始した。

く結界内く

私は昨日と同じように、飛翔してクワガタの前に出るとわざと追われる様に動き、地面から突き上げるように結界の一番高い所に向かい、結界にぶつけて地面に落としたの。レイジングハートを構えて、

「レイジングハートいくよ!」

「Confirmed, Master. (了解です。マスター。)

Sealing mod

o, Setup.

「リリカル。マジカル。ジュエルシード、シリアル28。封印。」

といつものように封印して、レイジングハートの「Receive, Number 28」の音声と共にレイジングハートに収納したの。

〜私立風芽丘学園・夜〜

私はユーノ君が結界を解除するのを見届けながらバリアジャケットを解除しながら地面に座ってしまったの。それに気づいたユーノ君が、

「大丈夫なの？！は怪我したの？！」

と慌てて聞いてきたの。私は、

「大丈夫だよ。ユーノ君。ちよつと疲れただけだから。」

とこたえた。ユーノ君は少し暗い顔をしながら、

「家に帰ろうか？なの？！」

と言ってくれたの。私は「うん。」と答えて家に帰ったの。

その後、なのはとユーノは夕食やお風呂を済ましていつもより早く寝たの。なお例の鴉もなのはの戦いを見ていた。

第六話「二つの大きな出会いなの」

（海鳴市・ある一軒家）

なのは魔法少女になる一ヶ月程前。海鳴市内のある一軒家のリビングでは、一組の夫婦を見下ろす一人の人物と壁の近くに目に光の灯っていない痣だらけの男の子が座っている。夫婦を見下ろしている人物は、男の子に目をやりながらその夫婦に向かつて、

「自分の子どもに随分酷いことするんだな。」

と云い、まるでゴミを見るような目でその夫婦を見ていた。そしてその人物は男の子に近づき幾つかの質問をしてある事を直接的には無いが確認した。ある事とは、夫婦からすべての事を肯定するように洗脳されていることと、男の子が夫婦を憎んでいることである。二つの事を確認したその人物は男の子に、

「君はどうしたい？君を虐待したこの二人を？君が望むならこの二人を生かす事も消滅させる事を出来る。」

と聞いた。男の子は自分に恐怖した視線を向ける自分を虐待していた夫婦を軽蔑した視線で一瞥しながら、一言小さな声で「消えてほしい。」と言った。夫婦は絶望してい

だが、男の子がそう言うとその人物は分かっていたので、

「了解。それじゃ消えてもらおうか！ 罪を背負いし罪人よ断罪されよ、ジャツジメント。」

と言い理由を聞かずに、呪文を唱えて黒い魔力光を放ちながら夫婦を消滅させた。そしてその人物は、男の子に向かって、

「自己紹介がまだだったね。私の名はメフィスト、魔導師だ。よろしくね。」

と自己紹介した。男の子も、

「初めましてメフィストさん。助けてくれてありがとうございます。僕の名前は影沼亮夜です。なぜ僕を助けたんですか？」

と自己紹介しながら、自分を助けた理由をメフィストに聞いた。メフィストは、「君には魔導師の才能がある。そしてその力を使って手伝ってもらいたいからだ。」

と言った。亮夜はそれを聞いて、自分が必要とされていると思いき嬉しくなりメフィストを信頼することにした。更にメフィストが虐待の傷などを魔法で治療したので妄信レベルで信頼した。

その後メフィストは「必要になったら連絡する。」と言って消えた。亮夜は夫婦の金（10年少々は一人で暮らせるぐらいの金額。）で生活することになった。学校には通っていない（年齢は10歳なのだが、夫婦が虐待していることが露天するのを防ぐために

通わせていない。しかし将来的にはもっと洗脳した亮夜の金で生活したかったので、同学年よりも難しい内容を無理やり勉強させていた。学力は聖祥大附属小学校にはある程度余裕で入れるぐらい。)

～海鳴市内のあるビルの屋上～

なのはがウサギに変化したジュエルシードを封印した夜。あるビルの屋上に魔法陣が展開されて一人の金髪少女が髪の毛を風になびかせながら現れた。少女は海鳴の街並みを見ながら、

「この街の何処かに母さんの願いを叶える物がある。」

と呟いていた。そして少女は後ろを振り返り、ビルに入って行った。

～海鳴市内～

翌日、少女は海鳴市内を歩いていた。時おり周りに人が居ないタイミンで、金色の三角形のアクセサリ―様な物を持って何か呟いていた。何度かそれを繰り返している。と突然走り出した。

～海鳴市内のある公園～

走り出した少女は海鳴市内に有る人の気ない公園に来ていた。少女は何かを探しているかの様に、公園の中に有る雑木林に入ってしまった。雑木林を歩いていた少女はある木の下に野ウサギの親子が住んでいるのを見つけた。その時だった、後ろから獣の様な

叫び声が聞こえてきた。少女が振り返ると豹の様な生き物が走って来ていた、少女は三角形のアクセサリーを前に出した。直後に豹が突撃してきて砂煙が上がった、そして砂煙が晴れると魔法陣を展開している少女が居た。少女が何か呟いた直後に周辺一帯が閃光に包まれた。閃光が消えると豹の様な生き物は消えていて近くにはジュエルシードが落ちていたので、豹の様な生き物はジュエルシードが変化した物だった。少女はジュエルシードを拾うと雑木林から出て行った。

雑木林から出て行った少女は疲れていたのか、公園内のベンチに座っていた。そして少女はふつと周りを見渡すと、

「そういえばここ何処だろう？まだバルディッシュに地図読み込ませていないのに。」

と言い、自分の現在が分からないことに気づいた。どうしよう考えていると突然、

「どうしたの？大丈夫？」

と声かけられた。私は「ひゃ!？」と言いながら声の方を見ると、自分とあまり歳の変わらない男の子が立っていた。

亮夜がメフィストに救われてから一ヶ月が経ち、亮夜は夫婦からの支配がなくなった生活を謳歌していた。亮夜は買い物をするために商店街などに向かっていると、途中にある公園のベンチに自分とあまり歳の変わらない金髪の少女が座っていることに気づいた。亮夜はなんとなく気になり近づいて、

「どうしたの？大丈夫？」

と声をかけた。少女は「ひゃ!？」と言いながら、亮夜の顔を見た。亮夜は少女の顔を見て「可愛い。」と思いつつながら、

「ごめんね。驚かせちゃって。何か困ったことがあったの？」

と話しかけた。少女は少し迷いながら、

「実は道に迷ってしまったんです。××○○というマンションに行きたいんですが、道分かりますか？」

と自宅のマンションの事を聞くと、亮夜は、

「あそこのマンションだね。分かるよ。丁度そっちの方に行くつもりだったから案内するよ。」

と答えた。少女は申し訳なさそうな顔で、「お願いします。」と言って立ち上がった。

く海鳴市内く

亮夜が歩きながら、

「そういえばまだ名前を名乗って無かったね。俺の名前は影沼亮夜。亮夜と呼んでくれて良いよ。君の名前は？」

と自分の名前を名乗りながら少女の名前を聞いた。少女は、

「フェイト。フェイト・テストアロッサです。案内してくれてありがとうございます。」

と名乗りながら亮夜にお礼を言った。亮夜とフェイトは歩きながら、

「フェイトつて引つ越して来たばかり？」

「はい。引つ越して来たばかりなんです。色々な場所を覚えようと散策していたら迷つてしまつて。」

「それでどうしようか公園で考えていたわけか。」

「はい。迷つていたら近くに公園があつたので、公園のベンチで休憩も兼ねて座つて考えていたんです。」

「なるほど。その時に丁度俺が通りかかつたわけか。」

「あのく亮夜さん。どうして私に話しかけてくれたんですか？」

「なんとなく困つていそうだったから（ついでにほつとけない雰囲気が出てたから）。」

「そうだったんですね。何かそういう力を持つているんですね。」

「まあな（そういう力が必要だったからな）。あつ！フェイト着いたみたいだよ。」

「あつ！本当だ。ありがとうございます。」

「どういたしまして。それとここから真っ直ぐ行くと大きなストリートがあるから、そこに地図があるからそれで道を覚えてみて。それじゃまた機会があつたら会うかもね？ じゃあな。」

「分かりました。ありがとうございます。またいつか。」

と会話してフェイトの自宅の前で別れた。

この時にお互いに家族のことは話さなかった。

くフェイト自宅く

フェイトは自宅に帰ると、今日手に入れたジュエルシードを見ながらさつきまで一緒だった亮夜のことを思い出していた。その時のフェイトは「亮夜のまた会えないかな。」と考えていた。

く亮夜自宅く

買い物が終わらせて帰宅した亮夜は、今日会ったフェイトの事を思い出していた。その時の亮夜は「フェイト可愛いかったな。また会えたらいいな。」と考えていた。その時目の前に魔法陣が出現して、そこから半透明のメフィストと謎の腕輪が現れた。亮夜は驚きながら、

「メフィストさん。ついに僕の力が必要になったんですね？」

「亮夜その通りだ。そこにある腕輪は、宝玉輪といってお前に力を与える道具だ。それを用いてこの画像の女の子「フェイト？」：なんだもうすでに会っていたのか。ならば早い、フェイトを正体を隠してサポートしてくれ。方法は任せる。」

「了解しました。最後に二つ程確認したいのですがよろしいでしょうか？」

「構わない。何だ？」

「はい。それはフェイトの目的とあなたとの関係です。」

「フェイトは、私が今協力関係を築いている人物の娘だ。フェイトの目的は、この画像の青い結晶体を集めることだ。」

「了解しました。」

「うむ頼んだよ。正体を明かすタイミングはこちらで指示する。魔法の使い方は宝玉輪をはめれば分かるから。」

と会話をした。メフィストが消えた後亮夜は、「フェイトとまた会えるし、メフィストさんに恩返しができる。」と喜んでいた。

この日出会った亮夜とフェイトは、ジュエルシードをめぐる戦いの中心となり、これから長い付き合いになるとは思ってもうなかつたのだった。

く海鳴市内の一軒家く

二日後。なのはが風芽丘学園でジュエルシードを封印したあと、鴉はある二階建ての一軒家のベランダに来ていた。その家のベランダの窓が開いていて、顔は見えないが二人の人物が鴉の話聞いていた。鴉はその人物達に深紅色と藍色の石を渡していて、二人はその石から写し出されている映像を見ていた。二人は鴉に向かって、

「にわかには信じられないが、最近のなのはの様子に納得いった。」

「だけど直で見ないと信憑性が薄いよ。」

「だから完全に信用をするのはこれから良いか？」

と言った。鴉もそれには同意していたので、

「それで構わないよ。信用してくれた時は協力してくれ。」

と言った。二人が無言で頷いたのを確認して飛んで行った。

鴉と二人はジュエルシードをめぐる戦いにどのような影響を与えるかは誰も知らないのだった。

第七話 「街は危険がいっぱいなのか？」

「高町家・なのはの自室」

「寝ているなのはにユーノは、

「なのは、朝だよ。そろそろ起きないと。」

「と言っただけさ。そうとしている。なのはは、まだ起きたくなさそうな声で、

「今日は日曜日だし、もうちょっとだけお寝坊させて。」

と言った。

私は天井を見ながら首に掛けているレイジングハートを持ち上げながら見ていたの。

この時にレイジングハートの「Confirmation」の音声と共に、これまでに集めたジュエルシードのホログラムが出現したの。それを見ながら私は、

「ユーノ君と出会ってから一週間。集めたジュエルシードは、現在6個。私高町なのはも魔法少女として、幾らか様にはなってきたかとおもうんですが。」

と溜息を吐きながら考えていたの。すると心配してくれたユーノ君が、

「なのは、今日はゆっくり休んだ方が良いでしょう。」

と言ってくれて、私が「でも。」と言うと、

「今日はお休み。もう6つも集めて貰ったんだから、少しは休まないと身体が持たないよ。それに今日は約束があるんでしよう?」

とユーノ君が言ってくれたの。私は、

「そうだね。今日はジュエルシード探しはお休みにするよ。」

と言つて起き上がったの。

→海鳴市内の河川敷・サッカーグラウンド→

数十分後。今日は、私のお父さんが監督兼オーナーをやっているサッカーチームの翠屋JFCの試合の日。それを私とアリサちゃん・すずかちゃん・勇吾君・勇我君のみんなで応援しようねつと約束していたのでした。

士郎は応援席の方を見ながら相手の監督に、

「応援席も良い感じに埋まってたようだし、そろそろ試合を始めましょうか?」

と言った。相手の監督も「ですな。」と答えて試合が開始された。

試合が開始され、それを見ながら私はユーノ君と念話でお話をしていたの。内容は、サッカーの事や私がスポーツが苦手なことなどでした。私がスポーツが苦手なことを話したときにユーノ君が少し驚いたような表情を何故かしていたのは、少し気になったけどそのまま応援を続けたの。

→喫茶翠屋→

試合は2対0で翠屋JFCが勝利してその戦勝会を喫茶翠屋で開いているの。私達は外のテラス席でお茶をしていたの。話題は勿論ユーノ君の事なの。アリサちゃんとすずかちゃんが、

「前になのはの家で夕食を食べている時から思っていたけど、改めて見るとフェレットとは何かちよつと違くない?」

「そういえばそうかも?動物病院の院長先生も「変わった子だね」って言ってたし。」

と言うので、私が少し動揺しかけていると、勇吾君と勇我君が、

「フェレットのことは詳しくないけど、犬や猫なんかも種類ごとに見た目などの違いがあるからね。」

「勇吾の言う通りですよ。それに秋田犬やスコティッシュフォールドみたいに、長毛種と短毛種の二種類がいるような動物もいますから。」

と言ってくれたの。この時に私とユーノ君は内心ドキツとしながら、

「二人は気づいてるのかな?」

「多分違うと思うけど・・・。」

と念話で話していたの。私がユーノ君に「お手。」というときユーノ君が私の手に自分の手に乗せたの。それを見ていたすずかちゃんとアリサちゃんが、「可愛い。」「賢い、賢い。」と言いながらユーノ君を撫でていたの。私は念話でユーノ君に「ごめんね。」と謝っ

ていたの。その時お店のドアが開いたのが聞こえて、「そろそろ解散する時間かな？」と考えていた時にキーパーの子がジュエルシードを持っていたように見えたけど、「気のせいだったかな？」と思ったの。

私達も解散することにしたの。アリサちゃんとすずかちゃんは、
「久しぶりにパパと買い物。」

「お姉ちゃんとお出かけ。」

みたいなの。その時、

「お、みんなも解散か？」

とお店から出てきたお父さんが話しかけてきたの。私達は、

「あ、お父さん。」

「師匠、お疲れ様です。」

「今日はお誘いいただきありがとうございます。」

「今日の試合格好良かったです。」

とそれぞれが返事したの。お父さんが、

「四人とも応援に来てくれてありがとうがとうなく。帰るなら送って行くのか？」

と聞くと、アリサちゃん達は、

「いえ、迎えに来てもらいますので。」

「同じくです!」

「俺達兄弟は、買い物して帰るので大丈夫です。」

と答えていたの。お父さんも「そっか。」と言ひ私に

「なのははどうする?」

と聞いてきたので、

「ん、お家に帰つてのんびりする。」

と答えたの。お父さんも

「そっか、父さんもうちに戻つて一風呂浴びて、お仕事再開だ一緒に帰るか?。」

一度家に帰るみたいで、私も「うん。」と言つて一緒に帰ることにしたんの。

アリサちゃん達を

「「じゃーねー!」」

「じゃーなく。」

「お疲れ様です。」

「またあした〜!」

と見送つてお父さんと家に帰つたの。その直後にお父さんから「背が伸びたか?」と聞かれたの。

〜海鳴市内〜

ジュエルシードを持っているゴールキーパーの子は、マネージャーの子と一緒に帰っていた。そして一瞬だが、ジュエルシードが光っていた。

く高町家・なのはの自室く

疲れたなのはは、ベットに倒れていたがユーノに「寝るなら着替えてからにした方がよいよ。」と言われ怠そうに答えながら着替え始めて、ユーノに「ユーノ君も一休みしといた方がよいよ。」と言っていた。

着替え始めたなのはを見てユーノは恥ずかしそうになのはから背を向けたが、なのはが横になるとユーノは悲しそうな目をなのはに向けながら「やっぱり慣れない魔法を使うのは、相応な疲労なんだろうな……。僕がもつとしつかりしていれば……。。」と自分を責めていたのだった。

く海鳴市内く

ジュエルシードを持っているゴールキーパーの子とマネージャーの子が並んで歩行者用信号機が変わるのを待っている時だった。ゴールキーパーの子が「あ、そうだ!。」と言いながらズボンのポケットから青い石を取り出してマネージャーの子に見せたのだが、その青い石はジュエルシードだった。マネージャーの子が「綺麗な石だね。」とジュエルシードに触れた瞬間だった、ジュエルシードが光り出して二人を包み込んだ。そして空に向かって一筋の光が上ったのだった。

く高町家・なのはの自室く

私がベットで横になっていると突然ジュエルシードが発動したのを感じたの。すぐに起き上がるとユーノ君に「今のつて！」と言い、急いで着替えて階段を下りつて外に向かったの。

く海鳴市内く

ジュエルシードの反応を感じた私は見晴らしの良いマンションの屋上に上つていき、レイジングハートを空に投げて変身したの。そして周りを見ていると町中にたくさんの木が生えていて、隣で見えていたユーノ君が、

「あれは人が起動させてしまったものだ。ジュエルシードは人の強い思いに反応した時に、一番大きな力を発揮するんだ。」

と説明してくれたの。

それを聞いたなのは、キーパーの子がジュエルシードを持っていたことを思い出
し、

「やっぱりあの時の子が持っていたのがジュエルシードだったんだ。私気づいていたはずなのに、こうなる前に止められたかもしれないのに。」

と後悔していたのだった。だがなのはは、軽く息を吸うとユーノに

「ユーノ君。こういう時はどうしたら良いの？」

と聞きユーノも「えっ!？」と驚きながらも

「封印するには接近しないとダメだ。先ずは元となっている場所を探さないといけないけど…。これだけ広範囲に広がっているどうやって探したら良いのか…。」

と答えた。

私はユーノ君の答えを聞いてレイジングハートを「Area search」の音声と共に振りながら、

「リリカル。マジカル。探して、災厄の根源を。」

と呪文を唱えてサーチ魔法を使ったの。目を閉じて意識を集中させて、ジュエルシードによつて生まれた木々を隅々まで調べて元となっている場所を見つけたの。すぐに封印するためにレイジングハートを構えるとユーノ君が

「ここからじゃ魔法が届かないよ?なの?」

と言ったの。だけど私には何となく出来る自信があつて、レイジングハートに「出来るよね?レイジングハート。」と言うと、レイジングハートが「Shooting mode. Set up.」という音声と共に変形したの。そして私が「行って。捕まえて。」というと杖の先に球体状のエネルギーが生まれ、ジュエルシードに向かってビーム状になって飛んで行って命中したの。命中したのを感じた私は、

「リリカル。マジカル。ジュエルシード、シリアル。封印。」

と言いながらも一度同じ場所に撃ち込んだの。

ジュエルシードによって生まれた木々はなのはに打ち込まれた場所を中心に光に包まれて消えていった。ジュエルシードを封印したなのはは、レイジングハートにお礼を言いながら自分のミスと向き合っていた。

くなのはの内心く

あの時に気づいていたはずなのに、あの時に対処していたら多くの人に迷惑かけなかったの。もっと頑張つてジュエルシード集めをしてこれ以上迷惑をかけないようにしないと。

くユーノの内心く

僕は今回みたいに暴走したらどうなるかある程度知識があつたけど、それでもシヨツクが大きいのに何も知らなかったなのは大丈夫かな？僕がもっと支えないといけない。けどどやっぱりなのはは凄い才能を持っている、僕が使えない長距離射撃魔法を使えるんだから。

二人は気持ち新たにジュエルシードを集めるために前に進むのであつた。先に待っている出会いと戦い・その代償を知らずに。

第八話「動き出す者達」

「ジュエルシードが海鳴市内で発動する前日」

亮夜はメフェイストから貰った宝玉輪を上手く使うために練習していた。これまでの練習によって自身には、火・風・土・水・電気を自由に生み出せる力とそれに対応する獣型人形（ビーストドールズ）を生み出す力・幾つかの魔法が使えることが確認していたのだった。亮夜は、周りに誰もいないことを確認すると魔法陣を展開し鏡を出現させ、

「炎狼・旋虎・土竜・水蛇・久遠。ジュエルシードを発見したか？」

と海鳴市内に放っていたビーストドールズに聞いた。ビーストドールズの中で唯一自我と人型の姿を持つ久遠が、

「土竜が発見したみたいです。亮夜。」

と土竜がジュエルシードを発見したことを伝えた。亮夜は「わかった。」と言うとバリアジャケットを身に纏い鏡に映る久遠たちに、

「炎狼・旋虎・水蛇・久遠、土竜の居る場所に集合だ。俺もすぐ行く。」

と言い、狐のお面を被って鏡を消して飛翔した。

く海鳴市内・とある実業家別荘裏の湖く

亮夜達は、土竜が発見したジュエルシードを封印するために土竜の居る場所に集まった。亮夜は久遠達に結界を張らせるとジュエルシードに向かつて封印魔法を放ち、ジュエルシードを封印した。封印したジュエルシードを宝玉輪に収納すると久遠達に結界を解除するように言い、解除するのを見届けると「みんなお疲れ。」と言ってピーストドールズを同じように宝玉輪に収納した。

その後、亮夜は自宅に戻り夕食と風呂を済まし自室のベットに座って宝玉輪で投影した今回回収したナンバー16のジュエルシードのホログラムを見ながら、

「フェイトにどうやって渡そうか考えないとなく。まあ、フェイトに会う口実も考えないとだけど。」

と呟き、「明日考えよう。」と結論を出してベットに入って就寝したのだった。

くジュエルシードが海鳴市内で発動する少し前く

亮夜は市内を特に目的無くぶらぶら歩いていて、この少し後にすぐ近くでジュエルシードが暴走することを知らずに亮夜は、

「暇だなく。久遠達は昨日頑張ってくれたから、宝玉輪の中で休ませているけど。しかしどうやったらフェイトに会えるかな？」

と呑気に考えていた。その時、前に見覚えのある顔と髪型の人物が前を通り過ぎて行

き、慌てて亮夜は「フェイトー！」と呼んだ。フェイトは振り返ると驚いた様な嬉しそうな顔で「亮夜!」と答えた。二人は、

「フェイト、こんな町中で会うなんて凄い偶然だね。」

「うん、そうだね。私も一度亮夜に会いたいと思ってたの。」

「マジか!?俺も会いたいと思っただけだ。そうだな今暇?」

「うん(ジユエルシードの反応無いから)。今暇だよ。」

「じゃあ、どつかで座って話さない?」

「うん良いよ。」

とまるでデートをするみたいな会話と空気になっていた。しかし轟音共にその空気は壊れた。二人が音のする方を見ると、巨大な木が生えっただけで根が地面のアスファルトを割りながらこつちに伸びてきており、咄嗟に亮夜はフェイトを抱きしめて横に跳んだ。フェイトは地面を亮夜に抱きしめられながら転がっていき壁に当たって止まったが、二人とも気を失っていた。

くなのはがジユエルシードを封印しようとしている頃

なののはのいるビルとジユエルシードによって生まれた木々を同時に見ることが出来るビルの屋上に二人の人物と一羽の鴉が居た。二人の人物の内背の高い方が手に持つ双眼鏡を覗いて、

「なのはが本当に魔法使いになっている。お前も見てみるよ?——!」

と言い、もう一方に双眼鏡を渡した。渡された方も同じように覗いて、

「本当だ!確かに——」の言った通り魔法使いになっているな。」

となのはの姿を確認していた。二人とも振り返って鴉の方を向くと、

「お前の話を信じよう。」

「でも俺達の出番は無いかもな?」

と言った。鴉は頷くと、

「今の所は彼女達だけで十分だと俺も思うが、万が一他に集めている者達が現れるかもしれない。」

と言い、一応懸念があると二人に伝えつつも余り心配している声色ではなかった。

その後なのはがジュエルシードを封印したのを見届けると二人は地上に降り鴉は飛んで行った。

くなのはを見ていた二人組と鴉が居たビル・地上へ降りる階段く

なのはを見ていた二人は地上に降りる為に階段を降りながら、

「しかし本当なのはが、魔法使いになっているとは驚いたな。」

「本当にそうだよ!しかし何時魔法使いになったんだらう?」

「正確な日付は不明だけど、恐らく今年に入ってからだろう。取り敢えず万が一の準備

を進めよう。」

「了解。そういえばこの事を皆に伝える？」

「いや、このことは今は誰にも言わない。」

「分かった。しかしバレたら大変だな。」

と会話をしていた。

くなのはがジュエルシードジュエルシードを封印した後、

壁にぶつかって気絶していたフェイトはバルディッシュの「Master Master」の呼びかけで目を覚ました。フェイトは自分が亮夜に抱きしめられる事を思い出し顔を真っ赤になったが、亮夜が自分を庇った事も思い出し慌てて、

「亮夜。亮夜、大丈夫？起きて。」

と自分の身体全体を使って亮夜を揺すった。亮夜は最初は反応が無かったが、

「うん。ゲホゲホ…フェイト大丈夫か!!」

咳き込みながら目を覚ました。そしてすぐにフェイトの事を心配したが、

「亮夜、本当に大丈夫？怪我してない？」

逆にフェイトから心配された。亮夜は、

「大丈夫。何処も怪我していない。後さ物凄く顔が近いんだけど。」

と無事だと答えたが、フェイトの顔が物凄く近かったので二人とも慌てて離れた。

その後落ち着いた二人は今日は別れることにして、それぞれの自宅に帰ることにした。この際に亮夜はポケットからジュエルシートを取り出してフェイトに、

「前に拾った綺麗な石なんだけど、俺が持つているよりフェイトが持つていた方が似合うからあげる。」

と言つて手渡した。フェイトは戸惑いながら、

「ありがとう。亮夜。」

と言つて受け取つて亮夜と別れた。

　　海鳴市内・フェイトの自宅　　

亮夜と別れて自宅に帰宅したフェイトは亮夜から貰ったジュエルシートをバルデイツシュに収納するとソファーに横になつて、

「亮夜に抱きしめられて驚いたなく。今でも心臓がドキドキ言っている。でも何だろうこの嬉しいようなや恥ずかしいような気持ち。」

と亮夜に抱きしめられた事を思い出してまた赤くなっていた。

　　海鳴市内・亮夜の自宅　　

フェイトと別れて自宅に帰宅した亮夜は宝玉輪を起動してメフィストに、

「ジュエルシートを一個確保し、フェイトに渡しました。ジュエルシートは偶然拾った事にしました。」

と一報を入れていた。メフィストからの「了解した。」という連絡を確認するとソファアーに座ると、

「うあく！絶対！にフェイトに嫌われた。いきなり抱きしめるとか無いよな。でもあれはフェイトを庇うためだからしようがないよね。」

と項垂れていたが、顔を上げると横になりクッションを顔に乗せると、

「フェイト可愛いかったな。」

と言いながら悶えていた。

なのはがジュエルシードを封印した裏で後々大きな影響を与える者達が動き出したのだった。これによってこのジュエルシードをめぐる事件は大きくなっていくが、このことが関わっている者達が気づくのはまだ先の話である。